



村上一平（むらかみ・いっぺい）

1967（S42）年関西学院大学経済学部卒業後、日清製粉株式会社に入社。常務取締役などを経て2007年に株式会社日清製粉グループ本社代表取締役社長に就任。現在も同社特別顧問を務める。2012年4月、関西学院大学大学院文学研究科に入学。2015年4月、関西学院同窓会会長に就任。

10年間、グリーククラブ一色でした。佐藤和愛先生という音楽の先生がいらっしゃったのですが、この方が「グリーククラブに入りなさい。あなたなら大丈夫よ」と言ってくれたのです。私は運動神経が全くなく、いまだに昔の仲間うちでは「平に運動で負けることはとんでもない恥」なのです。そんな私にとって、佐藤先生の言葉はうれしかったですね。ただし、これには後日談がありまして、佐藤先生は時々私だけに声を掛けてくださったと

— 中学から大学まで10年間、関西学院で学ばれたわけですが、「番思い出に残っていることは何でしょうか。」

大学でもグリーククラブの活動に必死に取り組みました。グリーククラブは歴史あるレベルの高い合唱団でしたから、合唱にとことん打ち込み、4年生では部長を務めました。今はどうか分かりませんが、われわれの時はクラブでの練習とは別に個人レッスンも受けていました。ステージに立つためには、オーディションがあり、それに受かるためにみんな一生懸命でした。また、クラブを続けるために授業も真面目に受けました。勉強したのも「クラブのため」でした。

— 大学は経済学部に進まれました。どのような学生だったのですか。

もう一つ、中学から10年間、風邪でも休まずに神戸女学院のバザーに通ったという、自慢の（？）思い出もあります。

教育熱心な 父親の勧めで 関西学院中学部に入学

— 小さい頃はどのようなお子さんだったのですか。

大阪生まれの大阪育ちで、1945年3月に生まれた最後の戦中っ子です。両親が結婚して所帯を持ったのは北区の曾根崎新地でしたが、私が生まれた月に大阪が空襲に遭い、実家は燃えてしまいました。でも母が出産のために西区の病院に入院していたこともあり、家族全員無事だったのです。実家は町工場を経営し

ていて、もともと家があった曾根崎には事務所を置いていました。父が大変教育熱心な人で、居住地の小学校ではなく、曾根崎で住民登録をして、今は廃校となつた曾根崎小学校に越境入学をしました。曾根崎小学校は当時、名門北野高校へ入るルートだったのです。1年生の時、父は毎日一緒に登校し、教室の後ろでずっと授業を参観していました。学校が終わると、市電の駅まで送ってくれてから事務所に行き、母親に「今乗せたぞ」と連絡を入れるのです。家までは30分。最寄りの駅で母が待っていました。こんな生活をほぼ1年間続けました。ですから小さいころは、授業を親が後ろで見ているのは当たり前なことだと思っていました。

— 関西学院中学部に入学したのもお父さまの意向だったのですか。

仕事で知り合った方の息子さんが関西学院に通っていて、その方から「いい学校だから息子を入れたらどうだ。特に中学部長の矢内先生は素晴らしい教育者だ」と勧められたようです。そこで父は実際に矢内先生に会いに行き、話をし、その人柄、教育理念に感銘を受け、「息子を託そう」と思ったということでした。

グリーククラブ一色の 学生時代 合唱にいちずに 取り組んだ

Special Interview

新同窓会会長 村上一平 Ippei Murakami

2015年4月に大橋太郎前会長からバトンを受けた村上一平会長。現在、関西学院大学大学院文学研究科博士課程の学生でもある村上会長に、中学部から10年間を過ごした関西学院での思い出や現在の学び、これからの同窓会運営などについてお聞きしました。

同窓生ひとりひとりが与えられた場所で
今やるべきことを実行すれば
それが関西学院のブランド力の向上につながる





大3 グリー演奏旅行(アメリカ)ホームステイ先のご家族と

本来やるべきことを やらなかった後悔 そこからは 目の前のことにまい進

―勉強の面では、ご自身のための努力ではなかったのでしょうか。

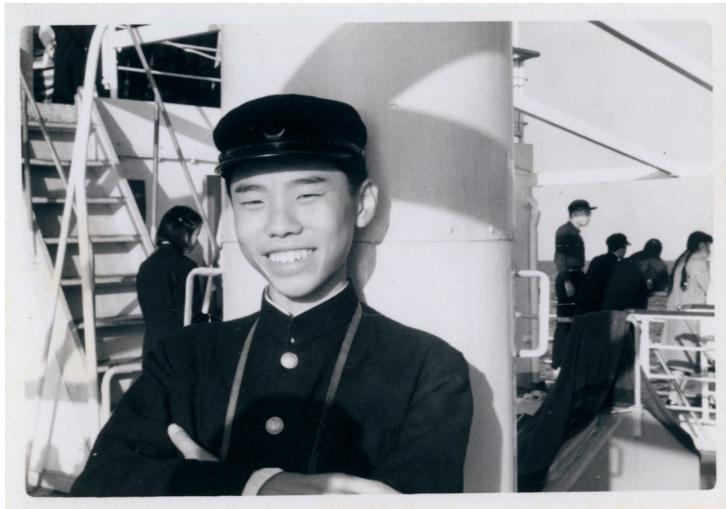
3年生の時に妻と出会いました。彼女は経済学部で1番の成績で入学し、2番で卒業した人なのですが、その勉強する姿勢にびっくりしました。「これが経済学部の学生なんだ」と痛感しました。その時、大学に入学してから与えられていた、経済学を学ぶことができる素晴らしい環境を無駄にしていたことに気付きました。「自分がやるべきことは経済学の勉強ではなかったのか」と自問自答し、一瞬ですが、グリークラブを辞めようとまで

経済成長期における農業政策」をテーマに研究を進めてきました。昨年の4月に博士課程前期課程(修士課程)を修了し、今は後期課程に進んで引き続き研究を続けています。

優秀なゼミの仲間と 触発され 忙しくも充実している 学生生活

―若い学生たちと一緒に研究をしておられるわけですが、いかがですか。世代間ギャップを感じられることはありませんか。

私はギャップを感じたことはないのですが、向こうはどうでしょうか。年齢からいえば孫でもおかしくないですからね。ゼミのメンバーはみんなものすごく熱心に勉強しています。文学部の大学院に進むと、就職先は限られてしまいます。適当な勉強では生き残れないので、まず「大学院に進みたい」と思った時点で向学心が半端ではありません。そんな中に、日本の近現代史に興味がある程度で入った私は、「大変な所に来てしまった」と思いました。とてもじゃないけど、追い付けなそうですよ。そこで、日清製粉にいたことが少しは役に立つかもしれないということで、農業政策史を専門に選んだのです。やりたいことをやっていますから、学生



中3 九州への修学旅行

思いました。でも、それまで10年近く必死になってやっていたことを投げ出すことはできませんでした。結果的に、掛け替えない仲間を得ることができましたし、最後までやり切ったことで自信にもつながりましたから良かったのですが、「本来、そこでやるべきことをやらなかった」とい

う後悔はありました。就職してからはグリークラブのOB会にはほとんど参加していません。そうじゃないとまた後悔すると思いました。「今やるべきことは仕事だ」と自分に言い聞かせて仕事に取り組みました。

―仕事一筋だったという点で、趣味とかはなかったのでしょうか。

そのせいか、あまり趣味と言えるものがないのです。強いて言えば、ボーイスカウトですね。息子が始めたので親として手伝うようになりました。ほどほどにしておこうと思っていたのですが、元来のめり込む性格は治りません。リーダーの資格を取るために研修所に通いました。カブスカウト隊とボーイスカウト隊の隊長になれる資格を持っています。

―立ち居振る舞いがスマートなのは、ボーイスカウトの影響ですか。

グリークラブで歩き方を練習させられたからだと思います。3年生の時にアメリカに演奏旅行に行きました。その時の会場には幕がなく、出演者は舞台の袖から歩いてスタンバイするのですが、それを見ていたある方

らじを履いております。おかげで足はまめだらけですよ。

村上夫人よりのコメント

主人から関学を差し引くと0になってしまうようなひとなので(笑)、忙しい中でも会長を引き受けたのだと思います。(家庭人としては)企業にいた時は仕事に没頭して、殆ど家事のことは私に任せきりでした。今は、出来ることは自分でやろうと思ってはいるようですが………？

建学の精神を 維持するためには 経済的な 裏付けが必要

―このたび、会長として同窓会への提言をなされました。まず「つは」寄附文化を育てる」ということをおっしゃっています。

125周年の後ということで、「また

に言われたのです。「アメリカの合唱団の人たちはさっそうとしていて、『歌いたい』という気持ちがあふれている。それに比べて君たちは屠所へ引かれる羊のようだ」と。下を向いてぞろぞろと歩く様は見えて胸が締め付けられたそうです。それから、歩く練習ですよ。まず速足で、視線を上げてにこやかに、胸を糸で吊り上げられている感じで大股で歩くのです。そうすると姿勢がよくなつて、誰が歩いても格好よく見えますよ。

企業人生活に ひと区切りを 付けた後に 再び関西学院へ

―日清製粉グループの社長を退任された後、関西学院大学大学院に入ったのは、どんな理由からだったのですか。

企業人生活にひと区切りを付けた時、「残りの人生はやり残したことをやろう」と思いました。実は高等部時代、歴史を学びたくて一度は文学部への進学を考えたことがあったのです。「歴史学を研究するために大学院に入りたい」と思い立った時、関西学院以外の選択肢はありませんでした。半年間猛勉強の末、大学院の入学試験に合格し、2012年4月、文学研究科に入学しました。大学院では、日本の近現代史を専攻し、主に「高度

寄附か」と思っておられる方もいるでしょう。ただ、ここでのいう寄附文化はイベントのための寄附ではありません。私立の学校がその建学の精神を維持するためには、経済的な裏付けが必要です。仮に特定の誰かが経済を支えたとなると、学院の教育もそちらを向かざるを得なくなります。そうならば、我々の想い入れ深い関西学院が関西学院でなくなってしまう。関西学院を関西学院たらしめるのに必要なのが経済的なバックアップで、それを支えるのはわれわれ同窓生以外にないのです。日常的で永続的な寄附行為が母校を支えるのです。金額の問題ではありません。年額千円でも2千円でも構いませんので、それを永続的に毎年やってほしい。そのシステムを考えたいと思っています。

経済的に 困窮している学生に 学費を支給する 奨学金制度を

―「新たな奨学金の創設」も挙げられています。

関西学院で学んでいる学生のうち、毎年60人から70人が経済的な理由により退学しています。成績が悪くて放り出されるのならともかく、学ぶ意欲があるのに、経済的な理由で辞めざるを得ないと



いうのは、大変不幸なことです。大学の方にも奨学金はいくつかあるのですが、成績優秀でないともえません。学費や生活費を稼ぐためにアルバイトをしている学生に勉強する暇があるでしょうか。ですから、同窓会の奨学金は本当に生活に困っている人に、成績を問わず学費を満額出したいと考えています。今、実現に向けて話し合いを進めているところです。

家族も参加できる お祭りを 地域ごとに開催し 同窓生をつなぐ

―支部活動の活性化については、どうお考えですか。

「支部の活動に若い人や女性がなかなか集まらない」という声はよく聞きます。しかし、自分が若いころのことを考えると、若い人がそうそう出て来られるはずがありません。大事なのは、参加できるようになった時に行くことができる場所をいつでも用意し続けることです。今も多くの方が同窓会の支部活動を支えてくださっています。そして、2年に1度くらいは卒業生だけでなく家族も含めて参加できるお祭りのようなことが出来ないかと考えています。地域ごと、ブロックごとに開催し、持ち回り制にすれば各支部の負

担も減るのではないのでしょうか。そして、その大きなイベントの準備には、普段お集まりの方だけでは大変ですから、若い人の力が必要になります。準備のために集まっていれば段々と面白くなってくるものです。その中で、次世代の支部を担う方が出てくるかもしれません。（編集委員会注・本号50頁「西から東から」に関連記事を掲載しております。）

関西学院の ブランド力を 上げるのは 現役の人たち

―関西学院のブランド力を上げていくために、同窓会は何をやるべきでしょうか。

まず、関西学院のブランド力を誰が上げるのか。同窓会ではありません。現役が上げるしかないので。体育会かもしれないし、グリーククラブのような文化総部かもしれません。また、学生や教授陣が学会でいろいろな研究を発表することで上がるのかもしれませんが、いずれにせよ、現役の皆さんが、それぞれの場所で活躍をして名を上げていくのです。さらに、関西学院で学んだ学生が社会に出て、個々の力を発揮することによって、結果的にブランド力が上がることもあるでしょう。学生や教授陣、同窓生が「今やらなければいけないこと」を実行すれば自然

と結果が出て、関西学院のブランド力の向上につながるのです。われわれ同窓生は、現役が十分な教育を受けられるよう支えなければなりません。何が出来るのかと問われれば「寄附をする」ということになります。

―最後にOB、OGの皆さんにメッセージをお願いします。

関西学院くらいの規模で、これほど多くのOB、OGが各分野で活躍している大学は他にないのではないのでしょうか。経済界はもちろんのこと、本当に多彩な分野で卒業生が名を上げています。大変誇らしいことです。これからもますます頑張っていきたいと思っています。同窓会の役割には二つあります。まずは関西学院のための同窓会であること。先ほど申し上げた寄附や奨学金がそれに当たります。そしてもう一つは同窓生のための同窓会です。皆さんをつなぐために、今までいろいろなことを企画してやってきました。これからずっと続けていきたいと思っています。今後ともよろしくお願いいたします。